

# 感性を重視した地域連携型アクティブラーニング —《神河プロジェクト 2015 — 2017》の経験から—

## The Emotional Aspect of Community-Based Learning : A Case of 《Kamikawa Project 2015-2017》

日高 謙一  
Kenichi HIDAKA

### (要約)

神河プロジェクトとは現代社会学部現代社会学科の正課として取り組んだ地域連携型プロジェクト学習である。準備段階では慎重に与える課題を選び、学習プロセスを組み立てるが、地域の人たちとの交流・体験を通じて、学習者は計画とは異なる学習プロセスをたどることがある。神河プロジェクトは、学習プロセスの構造化と学習者自身による創発を意図したプロジェクトである。地域課題の解決に向けた提案は、学習者にとっては難しい課題だと認識されるが、学習者の活動の自由度を高め、学習者自身が到達目標を再定義できる学習環境を準備することで、学習者は地域課題を「自分ごと」としてとらえるようになり、最終成果物に対する自己評価は高まる。

キーワード：ディープ・アクティブラーニング、感性、地域連携、テキスト分析

## はじめに

神河プロジェクトとは、現代社会学部現代社会学科2年次前期に担当されている「ゼミナールⅠ」および「現代社会基礎実習A」の科目において、2015年度から2017年度にかけて実施した地域と連携したプロジェクト型学習（Project-Based Learning）である。地域創生というテーマの中で、兵庫県神河町をフィールドに学習者自身で地域創生課題を見つけ、調査にもとづき映像作品や政策提言を完成させることが、学習者に課せられた課題である。ただし、学習者は2年次前期という専門領域の学修の入り口にいる学生たちであり、また映像作品の制作を専門的に学ぶ学生ではない。したがって、質の高い映像作品やすぐにも自治体の政策として採用されるような政策提言を期待しているわけではない。学習者の既存の知識、過去の体験、他の科目で学修した知識やスキルと結びつけながら成果物を完成させることで、問題解決能力や論理的思考力を高めることが狙いである。

しかし、神河プロジェクトが目指したのは学習者の認知的能力の向上だけではない。多くの学習者にとって神河町はゆかりのない地である。また、必ずしも地域創生という課題に関心を持って履修している者ばかりではない。学習者を深い学びへと動機づけるためには、神河町の抱える諸課題を学習者が「自分ごと」としてとらえることが必要である。「自分ごと」化することを、課題解決に進んで関わりたいと思うようになったり、自分の住む地域の抱える課題に関心を持ったりする態度の変化として本研究ではとらえる。

学習者に「自分ごと」として神河町の諸課題をとらえさせるため、学習者の感性に訴えるものをプロジェクトに組み込んでいる。プロジェクトでは熱い想いを持って地域おこしに奮闘する人たちとの対話を重視してきた。また、プロ・ミュージシャンに参加してもらいプロジェクトに音楽を取り入るという取り組みを行ってきた。地域住民の中にも地域おこし活動に対する温度差は必ず存在する。「行政は何もしてくれない」、「何かしたいがお金がない」という声は多くの地域で共通して聞かれる悩みである。それは厳しい現実かもしれないが、行政に頼るだけでなく、住民自らの工夫で何か行動を起こしている人たちの前向きな姿勢を学習者たちに見せられるよう取材対象者の人選には注意を払ってきた。また、神河プロジェクトのシンボルとして制作された「たからもの」という楽曲は、様々なイベントで歌われおり<sup>1</sup>、神河プロジェクトと神河町住民、神河町住民と学生をつなげる役割を果たしてきた。

3年間の神河プロジェクトの中で、毎年度プログラムを少しずつ修正しながら、学習者の感性に訴える方法を模索してきた。本論文の課題はその実践をできる限り紹介しつつ、振り返りレポートの分析を通じて学習者の学びのプロセスを分析することである。特に、単に知識を得たというだけでなく、地域おこしという学習者にとってなじみが薄く、彼らにとっては困難な課題を「自分ごと」としてとらえる、より進んだプロセスまで到達できているかを検証する。

## 1 《神河プロジェクト 2015～2016》の概要と先行研究の整理

2年次配当の「ゼミナールⅠ・Ⅱ」および「現代社会基礎実習A～D」は現代社会学部現代社会学科のアクティブラーニングの核となる科目であり、2時間連続で同じクラスで開講している。現代社会学部開設2年目となる2015年度に初めて開講し、2年次前期に開講する「ゼミナールⅠ」・「現代社会基礎実習A」は、清原、岡崎、日高の3名の教員が担当してきた。各年度50～60名程度の学生が履修した。これらの科目では、中山間地域の地域おこしをテーマに、2015年度から2017年度まで兵庫県神河町をフィールドに地域連携型アクティブラーニングを展開してきた。シラバスには、①地域おこしの根底に人と人とのつながりがあることを理解すること、②地域の人たちと共感を持ってコミュニケーションができるようになること、③若者の視点から提案ができるようになることの3点を到達目標として掲げている。神河プロジェクトとは、これらの科目で正課として行ってきた活動および正課外で行ってきた活動を指す。

地域と連携した学習を円滑に進めるため、3名の担当教員と実習助手で前年度の9月から準備を始め、訪問先や取材対象者を決定していく。2～3月には現地実習の行程を作成するために訪問予定地の下見に行く。4月から7月までは正課として課題に取り組みさせる。地域おこしのテーマは、大きく①地域資源（自然、文化、農産物など）をとりあげ、その魅力を掘り下げ、伝え方や活用の仕方を提案すること、②人口減少への対策として子育て支援策や移住促進策を提案することの2つであり、そこからさらに具体的な課題を学習者自身が設定する。何をどう提案するかは学習者に委ねられているが、調査のフィールドや誰に会うかは科目担当者が設定している。つまり、神河プロジェクトはある程度構造化されたプロジェクト学習である。しかし、科目担当者の期待していた通りに学習者が学んだり感じとったりするとは限らない。むしろ、事前学習で得た知識と現地に足を運んで得た知識の乖離は頻繁に発生する。現地実習での地域の人たちとの交流を通じて、学習者たちが事前に設定していた課題が意外な方向に進展していくこともあれば、行き詰まり苦しむこともある。それでも、科目担当者の期待していた方向へ進むよう介入するのではなく、その時々学習状況に応じて柔軟に映像作品の編集方針や提案の方向を修正していくよう指導してきた<sup>2</sup>。さらに、参加は任意であるが、授業終了後も地域イベントなどに参加して、地域の人たちと交流したり、成果を発表したりしてきた。

以下では2015年度と2016年度の神河プロジェクトに関する学習者の学びの検証結果を岡崎・清原・日高（2016）、日高・岡崎・清原（2017）をもとに説明する。

### 《神河プロジェクト 2015》

2015年度の神河プロジェクトは「ゼミナールⅠ」・「現代社会基礎実習A」の3分の2の時間、90分授業にして20回分の時間を割いて取り組んだ<sup>3</sup>。最初に神河町職員による神河町全般についての講義（第7回）、その後神河町に関する全般的な知識、課された課題についての知識を獲得しながら、どのような映像作品を制作するのか、またどのような政策提

言をするのかそれぞれ案を持って現地実習での調査計画を立てる（第8回～第10回）。土日を使った一泊二日の現地実習を経て、現地実習後は作品プランにしたがって撮り溜めた動画を編集する、あるいは政策提言内容を具体化していく（第11回～第14回）。そして、完成した映像作品や政策提言を神河町と大学をインターネット中継でつなぎ、神河町長はじめ神河町の方々に対して発表する（第15回）。さらに、授業終了後の10月には神河プロジェクトの経験を1年次生に伝える場を設定した。また、11月には2005年の合併から10年を記念した「神河町誕生10周年記念式典」への招待を受け、6名の学生と「たからもの」を制作した2人のミュージシャンが式典に参加した。

2015年度の現地実習ではプロジェクト参加者全員が同一行程で動いた<sup>4</sup>。1日目は砥峰高原（自然資源）と山田営農（営農組織）、2日目は音楽と子育てイベントと中村・栗賀地区（空き家活用）という行程である。日高ゼミ1班はドラマや映画の撮影地として有名な砥峰高原での夏のイベント企画を提案し、日高ゼミ2班は山田営農のある山田地区の空き家を宿泊施設として利用する農業体験プランを提案した。清原ゼミ1班は親たちが自分の得意分野を子供たちに教える「パパ・ママ講師」の仕組みを提案し、清原ゼミ2班は空き家利活用のために、空き家に置かれたままになっている仏壇を預かったり、片付けを代行したりする仕組みや、若者に古民家の良さを体験してもらいSNSで発信してもらう制度を提案した。岡崎ゼミはK、A、M、I、Nの5班に分け、K班とA班は「たからもの」のミュージック・ビデオを制作し、M班は地元の木材で建てられた越知谷小学校、I班は神河町自慢の名水、N班は神河町のマスコット・キャラクター「カーミン」をテーマに映像作品を制作した<sup>5</sup>。

2015年度のプロジェクトでは、得た知識やその時々之间的感情を学習者自身が認識するため、振り返りのレポートを4回課した。自由に記述されたテキストデータを形態素解析にかけ学習者の知識獲得状況を分析した。神河町や自分たちが取り組む課題についての学習者の知識量は、事前学習、現地実習、事後学習とプロジェクトの進行にしたがって順調に増加していった。また、ネガティブ、ニュートラル、ポジティブの3択の選択肢を与えて「あなたは地域おこしに貢献できるとおもうか」という質問をしたところ、プロジェクトの進行にしたがってポジティブな回答は増加していった。さらに、神河プロジェクトを通じて地域おこしについて学んだことを記述させたところ、ないものを新たに作ろうという発想ではなく地域資源の魅力を再発見することの重要性や、現地に行くこと、現地の人たちとコミュニケーションをとることの重要性を多くの学習者が記述していた。神河プロジェクトの経験から、「私も地域に貢献することができる」という感情や「もっと神河町と関わりたい」という感情を多くの学生が抱いたことは大きな成果であった。しかし、知識の広がりには限定的であったし、地域住民との交流の機会も限定的であった。そのため、2016年度は学習者の活動の自由度を高めることにした。また、清原ゼミ、日高ゼミの政策提言班の構成人数は8名から9名と、協働学習の最適な規模からは多すぎたためより少人数の班構成にすることにした。

## 《神河プロジェクト2016》

2016年度の神河プロジェクトは「ゼミナールⅠ」・「現代社会基礎実習A」の15回すべての時間を使って実施した。90分授業30回分となる。初回のオリエンテーションの後、神河町職員による講義（第2回）、事前学習（第3回～第5回）の後、事前学習の成果や現地実習での調査計画をポスターにまとめて発表する回（第6回）を設けた。このポスター発表の回には兵庫県議会議長および兵庫県職員を招き、それぞれの発表に対するコメントをもらった。この時のコメントはいわば現地実習時の宿題である。コメントも参考に調査計画を修正し（第7回）、一泊二日の現地実習を行なった。その翌週に兵庫県議会を訪問し、地域創生課題について議長はじめ各常任委員長と意見交換を行なった（県議会サテライトゼミ）（第8回）。振り返りレポートには、多くの学生がこの意見交換を通して政策提言のための新たな視点や知識を得たと記述している<sup>6</sup>。その後、事後学習（第9回～第13回）をへてインターネット中継による発表（第14回）は2015年度と同様である。最後に神河プロジェクトを通じて何を学んだかの個人発表を行った（第15回）。

授業終了後の8月、「神河シニアカレッジ」で成果を発表し直接コメントをもらう機会を持った。また、2年続けて現地実習でお世話になった山田営農の協力を得て、神戸学院大学大学祭に模擬店を出店した。米粉で作ったお好み焼きと根宇野地区の特産品であるゆずのジュースを販売した。新野地区の秋祭りに参加した者もいた。

兵庫県議会での意見交換以外に、2016年度は地域住民との交流機会を増やし、学習者の活動の自由度を高めるため、現地実習の行程を大きく変更した。1日目の午前中、神河町に入るとすぐに山田地区（2015年度にも訪問している山田営農のある集落）で、地区の方々と共に地区の米、米粉、野菜、ブルーベリーを使った昼食作りを行った。また、2日目の午後は3つの行き先に分かれた<sup>7</sup>。政策提言班が増えたため、2つの大きなテーマの中で課題が細分化した。

日高ゼミ1班は観光資源を活用した交流人口の増加を目的に、家族をターゲットにした自然を体験できるサマーキャンプや、新野地区に人を呼び込むための水車祭りを彩る灯籠作りを提案した。日高ゼミ2班・3班は米粉の用途開発を提案した。2班はせんべい、3班はパウンドケーキを試作した。日高ゼミ4班は米粉のCM動画を作成した。小麦アレルギーのある人にとって代替品となること、小麦に比べて油の吸収率が低くヘルシーであることを訴求した。清原ゼミ1班・2班はともに子育て支援の課題に取り組んだが、1班は行政の子育て支援制度が子育て世代に正確に伝わっていないことを課題としてとりあげ、ママ友の交流を通じて情報を伝える方法を提案し、2班は地域住民同士の強いつながりを子育て支援に活かす提案を行った。清原ゼミ3班・4班は定住促進というテーマのなかで、3班は婚活イベントの開催を、4班は空き家を利用して短期間のお試し移住とこの年に配置された移住コーディネータの活用案を提案した。清原ゼミ5班は実際の移住者に神河町に移住した理由をインタビューした映像を編集し移住促進のCMを制作した。岡崎ゼミではK班が2016年版のミュージック・ビデオ、A班が名水を、M班が山田営農の6次産業化の取り組みを、I班が空き家活用を、N班が「カーミン」をテーマに映像作品を制作した。

兵庫県議会サテライトゼミ、地域住民との交流機会の拡大の他に、2016年度のプロジェクトの大きな変更点は、2015年度に神河プロジェクトに参加した学生を学習者に対するアドバイザー役として6名採用したことである。神河プロジェクトでは彼らをピアサポーターと呼んでいる。振り返りレポートの記述量という点から見てピアサポーターの効果は非常に大きかった。2016年度の学習者は様々な機会にピアサポーターから前年の経験を聞くことができたため、神河町についてや自分たちが取り組む課題についての知識はプロジェクトの早い段階から得られた。

しかし、現地実習直後に記述量はピークになり、その後最後の振り返りでは横ばいまたは減少傾向にある。レポート記述量から見る限り事後学習を通じて知識が増えていないという結果となった。班が増え、課題が細分化したことが理由かと疑い、班ごとの記述量を比較してみたが、取り組む課題についての記述量さえも全体平均を下回る班があった。それは映像制作の班にはみられず、政策提言班のみにみられた現象だった。しかし、「あなたは地域おこしに貢献できるとおもうか」という質問に対しては、2015年度同様にプロジェクトの進行にしたがってポジティブな回答が増加していた。知識が増えないのになぜ効力感が高まるのかを探るため、学習者全体の集計レベルではなく個人レベルでの分析を行った。

最終の振り返りレポートで、【質問2】「上記の地域の課題について、あなたは課題解決に向けたどんな提案ができましたか／どんな作品を作れましたか？」と問い、自由に記述させた。この質問に対し、自分たちの班が最終的に成果として発表した内容が記述されると予想された。2015年度の振り返りレポートではそうであった。この質問に対する記述の形態素分析を行い出現する名詞の数を数えると、平均よりも少ないグループに30名（分析対象総数50名）いる。彼らは記述するための知識が乏しかったのか、あるいはレポート記述が面倒なだけだったのか、この問いの形態素解析からはその理由はわからない。

次に、【質問3】「まちづくりや地方創生の施策を考える際に何が重要なのか、ゼミナール／実習を通じて学んだことを記入して下さい」と問い、自由に記述させた。同じくこの記述の形態素分析を行い、各記述に出現する名詞の種類と出現回数によって2グループに分類したところ、上記の30名は20名：10名に分かれた。20名になるグループの記述で出現確率が高い単語を調べると、「コスト」、「実現可能性」、「誰」という単語が抽出される。これは県議会サテライトゼミの影響ではないかと考えられる。「コスト」という単語は2015年の学びの記述にはほとんど出てこなかった単語である。つまり、この20名は現実の様々な制約のなかで自分たちの班の提言内容を具体化できなかつたグループではないかと推察される。

再び【質問2】に戻って、この記述で出現する名詞の種類と出現回数によって2グループに分類した。出現確率の高い単語の特徴から、この2グループは、1つは政策提言班、もう1つは映像制作班と推察される。そして【質問2】の記述量が少ない30名のうち27名は、その記述内容から1つ目のグループ、政策提言班と判別できる。映像制作班は政策提言班よりも地域住民との接点が多いことや、成果が形になることがこの差の原因だろうか。あるいは政策提言は映像制作より困難な課題で成果を出すことが難しいと認識されて

いるためだろうか。現地実習での体験、課題の性質、課題の難度の認識は成果に何らかの影響を与えている可能性がある。

## 2 《神河プロジェクト 2017》の取り組みと課題の検証

### 《神河プロジェクト 2017》

2017年度の神河プロジェクトは2016年度のプログラムを踏襲しつつ、県議会サテライトゼミを第14回目、つまり提言内容、映像作品が一応完成し、インターネット中継により神河町長や地域の人たちに対して発表した後に実施するよう変更した。

開講1年目で授業運営のノウハウを十分に持たなかった2015年度は、3名の担当教員が協議の上、各班の課題、訪問場所、取材対象者を授業開始前に決定しており、現地実習行程はかなり構造化されていた。2016年度は、学習者と地域住民との交流機会を増やすために現地実習行程を変更したが、どこに行き、誰と話すかは担当教員が決めていた。2017年度は、学習者が地域おこしを「自分ごと」としてとらえるためには学習者自身に現地実習プランを立てさせる方が望ましいと考え、事前学習で班ごとに現地実習でどこに行き、どのような人に取材をしたいか検討させ、担当教員ならびに実習助手がアポイントメント取りと移動手段の調整を行った<sup>8</sup>。神河プロジェクトでは、現地実習での取材対象者の選定において、学習者たちが共感を持てるような人物であることを重視してきた。気さくで話好き、そして熱い思いを持って地域おこしに奮闘する人たちであり、プロジェクト3年目になり神河町住民の間でも本プロジェクトが認知されてきたこともあり、多くの地区で協力を得られた。

2017年度の現地実習行程は1日目の午前中以外はほぼ班ごとの行動となり、現地実習行程は前年度までの行程に比べ非常に複雑なものになった(図表1)。13班がそれぞれ別の行動をとるため、現地では大型バス2台、マイクロバス2台、JR播但線、神河町コミュニティバスを駆使し移動した。短期間にそのような対応ができたのは実習助手の奮闘のおかげである。各班のテーマと成果物は以下の通りである。

図表 1  
1日目の行程表

主な時間	回帰チームK たからもの(WO)	回帰チームA 自然・歴史 (A車・B式)	回帰チームM まちづくり・心と	回帰チームU グルメ・健康	回帰チームN 子ども・動物 ロープ・クライムの体験	清原1班 子育て支援・ 親子の体験づくり	清原2班 空き家・歴史的資源の活用 体験・お話し	清原3班 紙製の体験動物を手作りし たイラスト	清原4班 鳥害・風害・空襲人口高 スへの取組	日高5班 自然・アクチビティ	日高6班 自然と歴史	日高7班 食による地域おこし	日高8班 子供連れも楽しめる 神宮の祭
9:15	9:15 JR総務所前 じばさんビル前に集合(東路市南駅前123) ※公用車あり												
9:30	バス1号車 出発												
10:15	バス2号車 出発												
10:20	10:20-10:30 山田区 新生館(公民館)着 横山田農業社長あいさつ												
10:30	10:30-12:00 ③昼食作り 場所:山田区新生館(公民館)												
12:00	12:00-13:00 昼食												
12:30	12:30 2号車出発												
13:00	13:00 1号車出発												
13:45	13:45-14:00 ④ミニシアター上映 (山田区 山田1-14) 芝居の魂												
16:40	16:40 2号車出発												
17:00	17:00 2号車 農業事務所 出発 (神宮町中村59-1)												
17:20	17:20 マイクロバス出発												
17:40	17:00-18:00 グリーンエコー・芝居 劇場所「グリーンエコー・芝居 劇場所」(神宮町中村59-1) 劇場所「グリーンエコー・芝居 劇場所」(神宮町中村59-1)												
18:00	18:00-タ食場所「グリーン・ム」 ◆町長との懇談 ◆ミニライブ												



2日目の行程表

主な時間	岡崎チームK たからもの(MM)	岡崎チームA 自然・観光 (水車・名所)	岡崎チームM まろくすい-Oと	岡崎チームI クルマ・特産	岡崎チームN 子ども・動物 (ヨール島の森)	清流1班 子育て支援・ 緑子の伝説づくり	清流2班 空き家・歴史的建造物の活用 地蔵おこし	清流3班 地蔵おこし	清流4班 舞音・観光 空海人口拡大 への取組	日高5班 自然・アグリティビティ	日高6班 自然と歴史	日高7班 案による地域おこし	日高8班 子供連れおこし・ゆる りおの森
8:00	5(人数)	4	5	5	5	6	5	5	5	4	4	4	4
8:00~	朝会場所：日本間レストラン1階 8:55の発表(10分に合うように朝食をとること！)												
8:55	バス1号車 バス2号車 ※公用車あり												
9:10	バス15分												
9:10	9:10 ①児童センターきららら館(神河町中村29)着												
10:00	9:10~10:00 準備(50分)												
10:20	10:00~10:20 意見交換(進行：清流ゼミ)(20分)												
10:55	10:20~10:55 親子と大学生の歌と遊びのつどい(進行：岡崎ゼミ)(25分)												
11:40	10:55~11:40 遊び(進行：清流ゼミ)(45分)												
11:55	片付け												
12:00	11:40~12:00 片付けおよび集 まらぬ家 (弁当)	片付け	11:55 2号車出発 +公用車	11:55 2号車出発 +公用車	11:55 2号車出発 +公用車	11:55 2号車出発 +公用車	11:55 2号車出発 +公用車	11:55 2号車出発 +公用車	11:55 2号車出発 +公用車	11:55 2号車出発 +公用車	11:55 2号車出発 +公用車	11:55 2号車出発 +公用車	11:55 2号車出発 +公用車
12:10	バス20分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分
12:15	12:20 JR新野駅 乗車(弁当)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:10~12:45 ②赤や(神河町杉440-2) (昼食)
12:30	12:00 1号車出発 (福本・寺前時延田) バス20分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分
12:45	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)	12:45 ③赤や(神河町杉440-2) (昼食)
13:00	13:00 1号車出発 (福本・寺前時延田) バス20分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分	バス15分
13:15	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)	13:15~13:55 ④赤や(神河町杉440-2) (昼食)
14:00	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:00~15:40 ⑤赤や(神河町杉440-2) (昼食)
14:50	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)	14:50~15:30 ⑥赤や(神河町杉440-2) (昼食)
15:00	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発	15:00 1号車 出発
15:30	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発	15:30 1号車 出発
15:50	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発	15:50 1号車 出発
16:10	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発	16:10 1号車 出発
17:00	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発	17:00 1号車 出発

日高ゼミは2015年に策定された神河町地域創生総合戦略に掲げる観光入込客数増に寄与する提言を課題とした。日高ゼミ1班は、サイクリングの町としての神河町の可能性を見出し、越知川沿いにファミリーバイクで散策するコースの改善提案と本格的なヒルクライムルートの開発を提案した。日高ゼミ2班は、砥峰高原と福本遺跡を訪れ、観光開発の資金がない中でも地域の人たちが自ら情報発信する基盤づくりを提案した。日高ゼミ3班は、神河町には際立った農産物資源に乏しく、農産物ブランドを育てるために神河町の気候風土にあった農産物（ワサビなど）を導入し、地域内で農産物が流通する仕組みを作ることを提案した。日高ゼミ4班は、神河町の玄関口であるJR寺前駅の駅前商店街通りでさえ人通りや車が少ないことを逆に利用して、駅前通りに車の乗り入れを禁止し、子供が自由に遊べる空間づくりをすることを提案した。清原ゼミ1班は、神河町の豊かな自然を活用して若い親を対象として自然の中で親子一緒に遊ぶ参加型イベントを提案した。清原ゼミ2班は、日本遺産に登録された銀の馬車道、中村・栗賀地区が盛り上がっていると思いきや、地区住民はそれほど盛り上がっておらず、銀の馬車道を観光資源として盛り上げていこうとする行政と住民の意見の不一致があることに気づき、両者が話し合いを重ね方向性を見出す必要があると提案した。清原ゼミ3班は、若者、都市住民への神河町の農産物、その加工品の販路開拓のため、都市での試食販売イベントの実施と、「神河ファンクラブ」というネットコミュニティによる情報拡散を提案した。清原ゼミ4班は、ヨーデルの森や山田地区のピノキオ館などの観光施設に対する改善提案を提案した。岡崎ゼミK班は、ミュージシャンたちの神河プロジェクトへの思いを聞くインタビュー動画と、それぞれの人が思う神河町のたからものを映像でつなげた作品を制作した。A班は、神河町の美しい川と水とともに暮らす住民の姿を映像作品にした。M班とI班は、移住者や地域おこし協力隊の人たちに神河町の人についてインタビューした作品を制作した。N班は、「おいでよ ヨーデルの森」というタイトルで観光施設ヨーデルの森をPRする動画を制作した。

2017年度の提案内容は過去2年と比べてかなり具体的で、学習者の学びも豊かになっている。それは最終振り返りレポートの学びの記述（「まちづくりや地方創生の施策を考える際に何が重要なのか、ゼミナール／実習を通じて学んだことを記入して下さい」）の記述量からも明らかである。図表2のデータ件数とは形態素解析を行ったレポートの件数、単語総数とは意味語と呼ばれる名詞、形容詞、動詞の出現件数（1つのレポートに同じ単語が何度使われていても1件となる）、1件あたりの単語数はレポート1件あたりの出現件数である<sup>9</sup>。1件あたり単語数は2016年度から倍増している。2017年度の振り返りレポートは自由記述だけでなく選択式の振り返り質問も採用した。また、ループリックを用いた学習者による自己評価も実施した。

図表2 意味語の出現件数の年度比較

年度	データ件数	単語総数	1件あたり単語数
2015年度	50	882	17.6
2016年度	51	1285	25.2
2017年度	58	2934	50.6

## 2017年度振り返りレポート

2017年度の振り返りレポートは第6回のポスター発表後、セメスター中間に行った現地実習直後、第14回の県議会サテライトゼミ後の3回課した。1回目の振り返りレポートの評価要素は、課題の発見、課題に関する事前調査、現地実習準備、2回目は現地実習における調査活動、3回目は課題と目標設定、成果、プレゼンテーションである。これらの要素についてICEアプローチにもとづくルーブリックを作成し、自己評価させた<sup>10</sup>。

ICEとはアイデア (Ideas)、つながり (Connections)、応用 (Extensions) という学習プロセスを表し、 $I \rightarrow C \rightarrow E$ とプロセスが進むにしたがって学びが深まっていく。Iとは新しいことを学ぶ際の初歩的な知識、スキル、手順などを学ぶプロセス、Cとはアイデアどうしの関係を理解するプロセス、そしてEとは学んだことを本来の学習の場から離れて使えるようになるプロセスである。学習プロセスはたいていこのICEというプロセスをたどるといえる。ICEアプローチとは、学習によって得られた結果ではなく、学習者の学習がどれだけすすんだかを評価するアプローチである (Young & Wilson 2013, 3-9 ページ)。

これを神河プロジェクトにおける学習者の学習プロセスで考えるなら、Iとは神河町や取り組む課題に関する基礎知識、現地調査で得た知識、映像編集のスキルなどを学ぶプロセスである。Cとは、神河プロジェクトで学んだことを自分自身の体験や他の授業などで学んだことと関連づけて理解したり、事前学習で学んだことと現地実習で得た知識や感覚にギャップを感じた時にそのギャップを自分なりに理解したりするプロセスである。Eとは、企画を作り上げたり、企画を実現させるための方法を考察したりするプロセスである。成果物を完成させるためには当然  $I \rightarrow C \rightarrow E$  と学習プロセスが進んでいくと考えられるが、Iのプロセスが不十分だったり、 $I \rightarrow C$ への転化ができなかったり、 $C \rightarrow E$ への転化の際に起こりうる問題を想像することができなかったりして、聞いてきたことをそのまま提案したり、実現可能性に疑問が残る提案だったり、グループの他のメンバーの活動にただ乗りしたりするということは起こりうる。したがって、成果物の完成・発表をもって、Eのプロセスまで学習が進んだということには必ずしもならない。

第1回目のレポートではICEの3つのプロセスに、まだ基礎的な知識を学べていないレベル (Iのプロセス途上) を加えた4レベルでルーブリックを作成した。しかし、自己評価のばらつきが小さく学習プロセスの進み具合を把握することが困難だったため第2回目以降は5レベルで自己評価を行うことにした。ICEのどのプロセスの水準を増やしたかは評価項目によって異なるため、以下では本稿の分析に関連する成果について説明する。

図表3 成果物に対するルーブリック

	成果物に対する自己評価
4	将来の実践、展開を考慮して成果物を完成することができている。
3	地域住民にどのように受け取られるかを意識して成果物を完成させることができている。
2	学んだ知識を、他の授業や自身の経験で既に得ていた知識と関連付けて成果物を完成させることができている。
1	事前事後学習、現地実習を通して学んだ知識を活用して成果物を完成させることができている。
0	レベル1を満たさない場合はレベル0となる。

図表3の成果物に対するルーブリックでは、Iのプロセスが不十分と評価した場合レベル0と評価する。自己評価でも教員評価でもレベル0の評価はなかった<sup>11</sup>。レベル1・2はCプロセス、レベル3・4はEプロセスである。

図表4は効力感と名付け過去の振り返りレポートでは3レベルで質問してきた質問である。この質問を他のルーブリックと同じく5レベルに変更し回答させた。これまで自由記述形式でしか行ってこなかった地域おこしに対する態度の振り返りについて、図表5のように初めて選択式で質問した。また、2016年度の振り返りレポートの分析によって生じた疑問、政策提言は映像制作より困難な課題だと認識されているのか、また目標到達を難しいと感じる程度が、成果物に対する自己評価や効力感、地域おこしに対する態度に影響を与えているのかを検証するため、目標到達の難しさの認識を問う質問を加えた(図表6)。図表7は上述の選択式回答の分布、平均値と標準偏差である。分析対象となったレポート数は57である。

図表4 効力感についての質問

	効力感
4	十分貢献できそうだ。
3	少しは貢献できそうだ。
2	どちらとも言えない。
1	あまり貢献できそうにない。
0	全く貢献できそうにない。

図表5 地域おこしに対する態度についての質問

	地域おこしに対する態度
4	地域おこしに進んで関わりたいと思うようになった。
3	自らの生活する地域(あるいは出身地など関係する地域)の問題にも関心を持つようになった。
2	関心を持って様々な情報に注目するようになった。
1	様々な社会問題について初めて気づいた。
0	自分には関係ないと思う。

図表6 目標到達の難しさの認識を問う質問

	目標到達の難しさの認識
4	十分な時間をかけても問題解決に必要な知識や能力を獲得するのは難しく、目標に到達することは非常に困難だ。
3	限られた時間(1セメスターの授業)では到達することが難しい目標だ。
2	課題解決に必要な知識と能力を授業の中で獲得すれば、完全ではないが、部分的には到達できる目標だ。
1	課題解決に必要な知識と能力を授業の中で獲得すれば到達できる目標だ。
0	既に持っている知識・能力で十分に到達できる目標だ。

図表7 選択式回答の分布と平均値・標準偏差 (N =57)

選択肢	成果物に対する自己評価	効力感	地域おこしへの態度
4	15.8%	19.3%	33.3%
3	45.6%	68.4%	35.1%
2	24.6%	10.5%	29.8%
1	14.0%	1.8%	1.8%
0	0.0%	0.0%	0.0%
計	100.0%	100.0%	100.0%

	成果物に対する自己評価	効力感	地域おこしへの態度	目標到達の難しさの認識
平均値	2.63	3.05	3.00	2.82
標準偏差	0.92	0.61	0.85	0.76

### 振り返りレポートの検証

2015年度と2016年度の振り返りレポートの分析から以下の仮説を導いた。

学習者が目標到達の難しさをより強く認識すると、成果物に対する自己評価も効力感も低くなる(仮説1)。また、成果物に対する自己評価が高くなると効力感も高くなる(仮説2)。

目標到達の難しさの認識は、政策提言班と映像制作班で有意な差は見られない。いずれの班でも到達目標は難度が高いと認識している(図表8)。

図表8 課題別、目標達成の難しさの認識の集計

	選択肢 → より困難				計
	1	2	3	4	
政策提言班	2.5%	30.8%	46.7%	20.0%	100.0%
映像制作班	0.0%	36.4%	45.5%	18.2%	100.0%
総計	1.8%	33.3%	45.6%	19.3%	100.0%

4つの選択式回答の相関係数(図表9)のうち、仮説通りに相関関係があり5%水準で有意になったのは仮説2である。仮説1については符号が逆でありかつ有意でない。課題の難度が高いと認識していても、成果物に対する自己評価だけでなく、地域おこしに貢献できるという効力感に対してもほとんど関連はない。成果物に対する自己評価と地域おこしへの態度、効力感と地域おこしへの態度には強い相関が見られる。また、効力感と地域おこしへの態度にも弱い相関が見られる。課題の難度の認識よりも、地域おこしへの態度が成果に対する自己評価や効力感に影響を与えていると考えられる。そこで、地域おこしへの積極的な態度が、成果物に対する自己評価と効力感にプラスの影響を与えるという仮説を立てた(仮説3)。

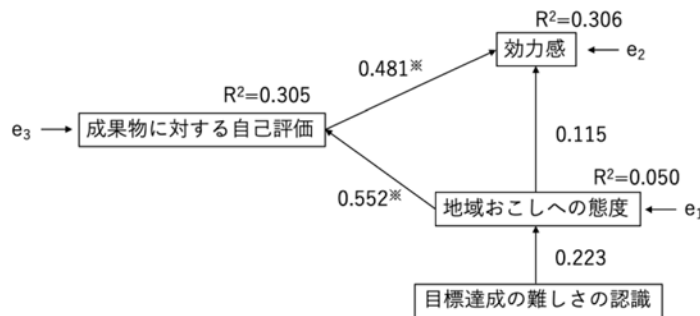
図表9 4つの選択式回答の相関係数

	目標到達の難しさの認識	成果物に対する自己評価	効力感	地域おこしへの態度
目標到達の難しさの認識	1.000000			
成果物に対する自己評価	0.084936	1.000000		
効力感	0.058876	0.5450014※	1.000000	
地域おこしへの態度	0.222754	0.5519756※	0.380971※	1.000000

※5%水準で有意

そこで、仮説2にもとづき成果物に対する自己評価が効力感に与える効果、仮説3にもとづき地域おこしへの態度が自己評価ならびに効力感へ与える効果を考慮したモデルを考えた。有意ではないが弱い相関が見られたため、目標到達の難しさの認識が地域おこしへの態度に与える効果も検証した（図表10）。モデルの適合度を表す指標は良好であったが、目標達成の難しさの認識→地域おこしへの態度のパス係数と、地域おこしに対する態度→効力感のパス係数は値が小さくかつ5%水準で有意にならなかった。仮説2と仮説3の一部が支持された。地域おこしへの態度は、成果物に対する自己評価を通じて効力感に影響を与えている。

図表10 4つの選択式質問間のパス図



Model Chisquare = 0.128 Df = 2 Pr(>Chisq) = 0.938  
 GFI = 0.999、AGFI = 0.994、RMSEA index = 0.00、SRMR = 0.015  
 パス係数の※は5%水準で有意であることを示す

さらに、地域おこしに対する態度と学習者の学びの関係を分析するため、地域おこしに対する態度の選択式質問で4（地域おこしに進んで関わりたいと思うようになった）と回答した19名を対象に、彼らがプロジェクト全体を通して得た学び（「神河プロジェクトを通じて、学んだこと、成長したことを記述して下さい。」）に記述している内容を分析した。自由記述内容の形態素解析を行なった後、この19名の記述に特徴的な単語を探すためリフト値を計算した。

リフト (lift) 値とは、例えば、カレールーを購入した人は同時にジャガイモも購入する確率が高いのかといった関連購買分析に用いられる指標である。事象Xが起こったとき、

事象Yが同時に起こる確率は信頼度(confidence)と呼ばれる。例えば、事象Xが100回起こったとき、事象Yが20回起これば、信頼度は $20/100 = 0.2$ となる。事象Yが40回起これば信頼度も2倍になる。しかし、それは必ずしも事象Xが事象Yを起こしやすくする条件となっているとは言えない。事象Xと関係なく事象Yが頻繁に起こっても信頼度は上昇する。そこで、信頼度を事象Yの生起確率で割った比率で、事象Xが事象Yの条件となる程度を表す。この値がリフト値である。振り返りレポートでは、例えば「難しい」という単語が19名のレポートのうち10名のレポートに出現すれば、信頼度は約0.526である。「難しい」という単語が57名全員のレポートのうち16名のレポートに出現すれば、「難しい」のレポート全体の出現確率は約0.276である。「難しい」のリフト値は $0.526/0.276 = 約1.906$ となる(小数点第4位以下を四捨五入して説明しているため図表の値とは若干ずれる)。

解釈可能な数にまで単語数を減らすため、レポート全体での出現件数が3以上、リフト値は1.000以上、信頼度が0.200以上という条件で単語数を絞りこみ、また「神河町」などの当プロジェクト固有の単語や、質問文にある「学ぶ」や「成長」も削除し、31単語を抽出した(図表11)。

図表 11 学びの自由記述回答から抽出した単語

語	リフト値	確信度	語	リフト値	確信度
必要	2.544	0.263	班	1.272	0.263
人前	2.035	0.211	問題	1.272	0.263
大変	2.035	0.316	今	1.221	0.316
感じる	1.928	0.632	自分たち	1.221	0.211
難しい	1.908	0.526	それ	1.221	0.211
今回	1.908	0.263	考え	1.221	0.211
活性化	1.744	0.211	取り組む	1.110	0.211
協力	1.696	0.263	経験	1.090	0.263
現地	1.665	0.316	動画	1.090	0.263
聞く	1.526	0.316	私	1.090	0.263
課題	1.526	0.263	できる	1.041	0.789
持つ	1.526	0.211	する	1.037	0.947
行く	1.409	0.316	地域	1.018	0.421
何	1.409	0.316	自分	1.018	0.421
発表	1.388	0.263	意見	1.018	0.211

振り返りレポートの質問で地域おこしに対して最も能動的な態度を示した学習者たちは、同時に地域おこしの難しさ(「難しい」)や大変さ(「大変」)を学んでいる。また、地域おこしに関わるために必要(「必要」)な何かをつかんでいる。そして、地域おこしにのみ関わるわけではないが、人前(「人前」)でプレゼンテーション(「発表」)をする経験からも学びがあったと考えられる。プロジェクト固有の知識やスキルの学びだけでなく、課題解決の見通しや、立場の違う人への意見の伝え方などのメタ知識を学んでいる。

以上の振り返りレポートの分析から、学習者はプロジェクト終了時においても担当教員から提示された(シラバスに示された)到達目標は自分にとって難しい、現在の能力を超えた目標であると認識している。しかし、その認識は成果物に対する自己評価や効力感に

はほとんど影響を与えていない。約 64% (37 名) の学習者が当該授業目標としては高すぎる目標だと認識していたが、約 61% (35 名) の学習者は成果物が応用レベル (Extension) まで到達できたと評価し、約 88% (50 名) の学習者は成果物が地域課題の解決に少しあるいは十分貢献できたと考えている。また、学習者が目標到達は難しいと認識していても、地域おこしに対するネガティブな態度にはつながっていない。約 68% (39 名) の学生が地域おこしに対する能動的な態度を持つようになったと回答した。

通常は、到達困難な目標と認識されるとポジティブな自己評価や効力感にはつながらないと考えられる。目標到達が困難であるにも関わらず、成果物が地域おこしに貢献できると考えることが矛盾を含んでいる。しかし、本プロジェクトでは、地域おこしに対する態度が学習者の自己評価にポジティブな影響を与えている。そして、高い自己評価が高い効力感を生じさせている。地域おこしという難しい課題を「自分ごと」としてとらえることが、客観的評価ではなく、学習者の自己評価や効力感にプラスの影響を与えている。

## おわりに

神河プロジェクトは知識やスキルの修得だけでなく、学習者の感性に訴えることを目標にしてきた。地域と連携したプロジェクト型学習において、連携する地域は、学習者が「よそ者」として新たな視点から地域の魅力を発見してくれることに期待している。しかし、「よそ者」という関わり方では地域に対する貢献は限られ、学習者の学習そのものが深まらない。3年間の神河プロジェクトの実践において、学習者に地域課題を「自分ごと」としてとらえるような学習環境を作り出すためにプログラムを改善してきた。構造化された学習環境のなかでも学習者の活動の自由度を高めてきた。学習者が安心して学べる構造化と偶然の出会いとのバランスが、地域課題に対する提案を最終到達点とするプロジェクト学習には重要である。

地域課題に対する提案という課題は、成果物がどのような形であれ学習者には難しい、つまり自分たちの手に負えないような課題だと認識されている。しかし、成果物が地域住民に受け入れられることによって、学習者は成果物を高く自己評価することができる。地域課題を「自分ごと」としてとらえなければ、成果物は地域住民の心情に沿ったものにはなりにくく、受け入れられない。《神河プロジェクト 2017》は、前年度までの取り組みよりも地域の人たちとのコミュニケーションの機会を増やし、学習者の感性に訴えるよう改善した。それにより、多くの学習者が地域課題を「自分ごと」としてとらえることができ、地域住民視点に立った成果物を完成させることができたと考えられる。

学習者は到達困難な目標ではなく、自分たちが授業期間内で到達できそうな小さな目標を発見してくる。それが起こるのは現地実習である。2016 年度でも 2015 年度と比べると活動の自由度は高めたが、現地実習を通じて自分たちの到達目標を発見できなかった班は提案に苦勞し、自分たちの成果物に対する高い自己評価につながらなかったのではないかと考えられる。2017 年度の神河プロジェクトは大きく現地実習時の活動の自由度を高めた。



そのことも成果物に対する高い自己評価と、地域に貢献できるという効力感や地域おこしに対する能動的な態度へとつながっていると考えられる。さらに、2017年度は県議会サテライトゼミで最終成果物を発表しフィードバックを得たことも、成果物に対する高い自己評価、高い効力感、地域おこしに対する能動的な態度につながっていると考えられる。県議会という政策を審議する場で発表を丁寧に聞いてもらい、講評やアドバイスをもらったことは学習者にとって大きな意味があったであろう。

学習者の活動の自由を高めるために、神河プロジェクトは年々学習環境の準備に手間ひまがかかるようになっていった。このようなプロジェクトは実習助手、ピアサポーターの補助がなければ運営は困難である。また、連携する地域にも授業準備に連動して動いてもらえる人物が必要である。このプロジェクトが神河町で行われた最大の理由は神河町にその人がいたからである。さらに、神河プロジェクトでは2015年度から2016年度にかけて年間約100万円の教育改革助成金を受けた。助成期間終了後も必要経費の一部は実習運営の経常費として予算が認められた。1つの科目の運営予算としては大きな額である。

神河プロジェクトの実施のために2015年度から2016年度にかけて神戸学院大学教育改革助成金を受けた。

註

- 1 楽曲「たからもの」は学習者の感性に訴えるだけでなく、神河町の人々の感性にも訴えている。1つの音楽を媒介して学習者と地域住民の感性の共振が生まれていると言える。詳しくは岡崎・清原・日高（2016）、日高・岡崎・清原（2017）を参照。
- 2 岡崎・清原・日高（2016）では、これを〈動いていくもののアレンジメント〉と表現した（101-102ページ）。
- 3 映像作品の制作はさらに時間を要した。正規の授業時間だけでも24回分、授業時間外の作業も必要であり、最後の修正はプロの映像作家が行なった。
- 4 2015年度神河町現地実習行程表

【1日目】（6月13日）

9:15	集合	JR姫路駅南口「じばさんびる」前	※ 集合場所の詳細は、次項参照のこと！！
9:30	発	<バス移動>	
10:30	着	砥峰高原	◆自然保護（資源活動） 【進行：日高ゼミ】 * レクチャー & 意見交換 * 散策
11:50	発	<バス移動>	
12:30	着	（昼食） （株）山田営農	◆営農組織の法人化・6次産業 【進行：日高ゼミ】 * レクチャー & 意見交換
14:30	発	<バス移動>	
15:00	着	越知谷小学校	◆教育（小規模校・山村留学） 【進行：岡崎ゼミ】 ◆木造校舎建築（林業振興） * レクチャー & 意見交換
16:30	発	<バス移動>	
17:00	着	グリーンエコー笠形	〒679-2411 神河町根宇野1019番地の13 TEL0790-32-1307 ※「グリーンドーム」
18:00		（夕食）	◆神河町長との懇談 ※ 健康保養館1階「響の湯」
21:30まで		（入浴） （宿泊）	※ 21:30までに入浴すること！！

【2日目】（6月14日）

8:00から		（朝食）	※「日本間・レストラン1階」 ※ 9:00の出発に間に合うように朝食をとること！！
9:00	発	<バス移動>	
9:20	着	児童センター「きらきら館」	◆きらきら館の事業内容について（9:20～9:35） ◆「親子と大学生の歌と遊びのつどい」（10:00～11:30） * 子育て中の親子と学生による、グループでの遊びと意見交換 （10:00～10:40） 【進行：清原ゼミ】  * 親子コンサート （10:50～11:30） 【進行：岡崎ゼミ】
		（昼食）	
13:00	発	<徒歩移動> 中村・粟賀の町並み	◆歴史的景観形成地区を活かしたふるさとづくり 【進行：清原ゼミ】 * 銀の馬車道交流館 見学 * 歴史ボランティアガイドによるレクチャー&散策
		粟賀町公民館	◆かみかわ銀の馬車道まちづくり協議会の取り組み かみかわ田舎暮らし推進協議会の取り組み * 空き家利活用・定住促進・起業についてのレクチャー & 意見交換
		<徒歩移動>	
16:00	発	公立神崎総合病院 駐車場	
		<バス移動>	
17:00	着	JR姫路駅南口解散	

- 5 これらは現在も神河プロジェクトのホームページ（<http://kamikawaproject.com>）で公開されている。
- 6 日高・岡崎・清原（2017）、39ページ。

7 2015年度神河町現地実習行程表

神河町実習 行程表

【1日目】(5月21日)

修正 2016.5.20

9:15	集合	JR姫路駅南口“じばさんびる”前	
9:30	発	<バス移動>	
10:20	着	(株)山田宮農 【場所:山田区新生館(公民館)】 (昼食)	◆ <b>営農組織の法人化・6次産業</b> 【進行:日高ゼミ】 *レクチャー & 昼食作り(米粉麺、お好み焼、おにぎり、サラダ、カップケーキ)
14:00	発	<バス移動>	
14:45	着	砥峰高原	◆ <b>自然保護(資源活動)</b> 【進行:日高ゼミ】  *散策
16:40	発	<バス移動>	
17:30	着	グリーンエコー笠形	〒679-2411 神河町根宇野1019番地の13 TEL0790-32-1307 ※「グリーンドーム」
18:00		(夕食)	◆ <b>神河町長との懇談</b> ※健康保養館1階「響の湯」 ※ <u>21:30までに入浴すること!!</u>
21:30まで		(入浴)  (宿泊)	

【2日目】(5月22日)

8:00から		(朝食)	※「日本間・レストラン1階」 ※ <u>8:55の出発に間に合うように朝食をとること!!</u>
8:55	発	<バス移動>	
9:10	着	児童センター「きらきら館」	◆ <b>きらきら館の事業内容について</b> (9:10~9:20) ◆ <b>「親子と大学生の歌と遊びのつどい」</b> (10:00~11:30) *子育て中の親子と学生による、意見交換(10:00~10:20) 【進行:清原ゼミ】 *親子コンサート(10:20~10:55) 【進行:岡崎ゼミ】 *遊び(10:55~11:45) 【進行:清原ゼミ】
3グループ に分かれて実習	<b>1グループ(菜や+栗賀散策)</b>		<b>2グループ(山田宮農)</b>
	バス1号車(清原ゼミ22人+岡崎ゼミチーム1 4人 教員1名 実習助手1名・ピアサポーター3名 映像関係者1名)計32名		バス2号車(日高ゼミ13名+岡崎ゼミ9名 教員2名 実習助手1名 ピアサポーター2名 映像関係者1名)計28名
	11:55発 バス出発		11:45~13:00 片づけ+昼食(きらきら館内)
	12:05着 「菜や」 昼食 ◆ <b>1ターンの若者と意見交換</b>		13:00発 バス2号車出発
	14:30発 バス出発		13:10着 山田宮農(ピノキオ館) ◆ <b>ピノキオ館とその周辺散策</b>
	14:45着 病院駐車場着(中村+栗賀散策) ◆ <b>グループに分かれて「神河たからもの」発見</b> <徒歩移動>		14:30発 ピノキオ館 バス出発
	15:35発 病院駐車場集合 <バス移動>		14:40着 ◆ <b>ブルーベリー畑、栗山、</b> <b>ライスセンター見学</b>
15:50着 カーミンの観光案内所		15:15発 バス出発 <バス移動>	
16:10 発		カーミンの観光案内所(JR寺前駅)	◆ <b>見学 他(3グループ合流)</b>
17:00 着		JR姫路駅南口解散	

- 8 学習者自身にこれをさせなかったのは(全くさせなかったわけではないが)、現地実習の際の各班の行動を教員が正確に把握しておく必要があったという理由以外に、失敗しても許される学習環境を確保するためでもある(日高・岡崎・清原 2016、25 ページ)
- 9 ユーザー辞書の修正が必要だったため 2015 年度～ 2017 年度のデータの形態素解析をやりなおした。手続きは岡崎・清原・日高(2016)を参照。

- 10 政策提言、映像作品という成果物に対する評価も直接評価ではなく、学習者自身に振り返り自己評価する間接評価を選択した。ループリックにもとづく科目担当者による成果物の直接評価を試みたところ、政策提言を行った学習者の自己評価は教科担当者の評価よりもやや甘く、映像作品を制作した学生の自己評価はやや控えめであった。
- 11 何らかの成果を発表するのでレベル0という回答がなかったのも当然かもしれない。この点はIプロセスの到達段階をより細かく設定する必要があったかもしれない。

## 参考文献

- [1] 石田基広、(2017)、『Rによるテキストマイニング (第2版)』、森北出版
- [2] 石田基広、小林雄一郎、(2013)、『Rで学ぶ日本語テキストマイニング』、ひつじ書房
- [3] 岡崎宏樹・清原桂子・日高謙一、(2016)、「地域連携型アクティブラーニングの研究(1)―《神河プロジェクト 2015》を事例として」、『現代社会研究』、第2号、98-127 ページ
- [4] 小野和宏・松下佳代・斎藤有吾、(2014)、「PBLにおける問題解決能力の直接評価 ― 改良版トリプルジャンプの試み」、『大学教育学会誌』、第36巻第1号、123-132 ページ
- [5] 金明哲、(2017)、『Rによるデータサイエンス (第2版)』、森北出版
- [6] 日高謙一・岡崎宏樹・清原桂子、(2017)、「地域連携型アクティブラーニングの研究(2)―《神河プロジェクト 2016》を事例として」、『現代社会研究』、第3号、21-46 ページ
- [7] 松下佳代、(2012)、「パフォーマンス評価による学習の質の評価」、『京都大学高等教育研究』、第18号、75-114 ページ
- [8] 松下佳代・小野和宏・高橋雄介、(2013)、「レポート評価におけるループリックの開発とその信頼性の検討」、『大学教育学会誌』、第35巻第1号、107-115 ページ
- [9] 松村真宏・三浦麻子、(2014)、『人文・社会科学のためのテキストマイニング (改訂新版)』、誠信書房
- [10] Young, Sue Fostaty & Wilson, Robert J. (2013) , 『「主體的学び」につなげる評価と学習方法』、土持ゲアリー法一監訳／小野桂子訳、東信堂